



平成22年3月8日

卓話 『私の履歴書』

女優

淡島 千景 様

淡島千景でございます。東京生まれの私がなぜ宝塚へ入ったか。私の親は、お嫁にやるとき旦那様と話が通じなければつまらない家庭になってしまうから沢山のものを見たり聞いたりすると、私もお習字やピアノなどへ通わされたんです。ですけど私、いっぺんに習う所はないかしらと思ひまして、東京宝塚劇場が有楽町にオープンして父が私たちを連れて行ってくれたとき、こんなに綺麗なものが世の中にあるのかと思ったことを思い出しました。あれを教えている学校があると思ひまして、3年だけという約束で母の許可を得て入ったんです。ちょうど戦争が始まりかけていたときでしたが一所懸命勉強しました。戦争が終わって、いよいよ私たちの望みを叶えて、欧米の、フランス人形みたいなのを着られる時代になったものですから、もうちょっとお嫁に行くのは待ってくれて母に延期を申し出たんでございます。

私、宝塚に9年間おりました。母は私がお嫁に行かないものですから怒りまして、もう好きになさいということで、とうとう行きそびれてしまったわけです。何年か経って私は映画に移りました。今みたいに労働基準法をきちり守れというんじゃなかったものですから、徹夜でやるという生活をしておりました。でも夢中でやっていたお陰で幸せだったのは、いろんな方とご一緒できたことです。松本幸四郎さん、尾上松緑さん、片岡千恵蔵さん、市川右太衛門さん。長谷川一夫さんとは大映でも舞台でもご一緒しました。この年齢になってまだお仕事をさせていただけるのは、そういうご縁とか見てくださった皆様方の評価が

大きかったと思います。自分の力は何もないんです、映画の場合。カット、カットで撮りますから。自分がどんなにうまくできたと思っても、監督さんがそこはいらないう思ったら削りま



すね。ですから映画は監督さんのもの。舞台は我のもの。舞台では引きずり降ろされませんからね。テレビは、あれは機械のもんですね。いくら自分がこっちでいい顔していても、あっちから写されれば写ってないっていうことでもございます。ですから3つとも違うものなんですけれど、それを全部体験できたことはすごくありがたいと思います。

私、松竹では小津安二郎先生のところに3度出させていただきました。その先生が「なんでもないことは流行に従う。重大なことは道徳に従う。映画のことは自分に従う」っておっしゃった。これはどなたでも言えることではないと思うんです。石の上にも3年って申しますけど、私は10年と思っております。それから健康。健康でなければ一つのことを10年できない。それから我慢。私、随分我慢いたしました。宝塚のときは意地悪がいっぱいありました。でもそれを我慢してたから、今こうして仕事を続けていられるんだと思います。そういう気持ちを持って、この仕事を続けていきたいと思っております。ありがとうございました。